

# 獣医師生涯研修事業のページ

このページは、Q & A形式による学習コーナーで、小動物編、産業動物編、公衆衛生編のうち1編を毎月掲載しています。なお、本ページの企画に関するご意見やご希望等がありましたら、本会「獣医師生涯研修事業運営委員会」事務局（TEL：03-3475-1601）までご連絡ください。

## Q & A 産業動物編

**症例：**豚，雌，70日齢。本例は発育不良及び呼吸器症状を示した。

**剖検所見：**肉眼的に心膜と心外膜は軽度に癒着し、僧房弁はポリープ状に肥厚していた（図1）。肺前葉を中心に灰白色硬化巣が認められ、肺門リンパ節が腫大していた。腹腔において腹水が貯留していた。

**病理組織学的所見：**心内膜において線維素の析出、好中球の浸潤、細菌塊、線維芽細胞及び毛細血管の増殖が認められた（図2）。また、心筋は変性・壊死し、心筋層及び心外膜においてリンパ球、形質細胞、マクロファージ並びに好中球が浸潤していた。

グラム染色ではグラム陽性球菌が検出された（図3）。

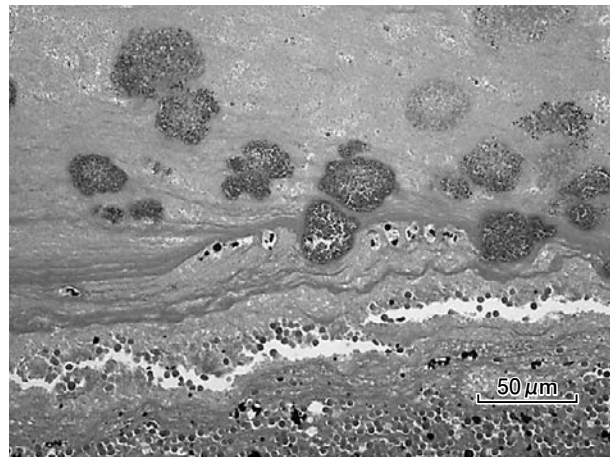


図2 心内膜において線維素とともに細菌塊が認められる。



図1 心内膜はポリープ状に肥厚する。

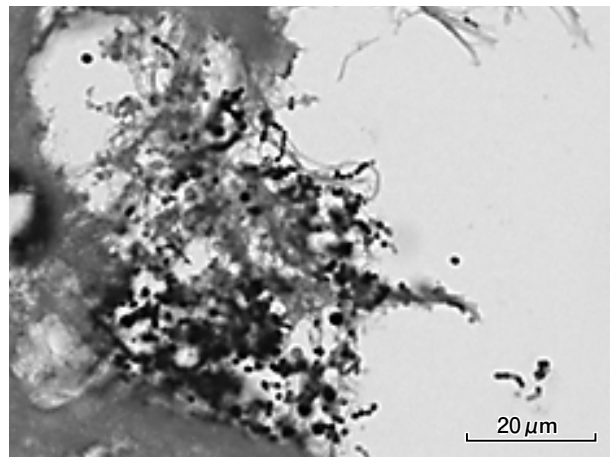


図3 心内膜のグラム陽性球菌を示す。

質問1：最も疑われる疾患は何か。

質問2：鑑別すべき疾患は何か。

（解答と解説は本誌287頁参照）

## 解 答 と 解 説

### 質問1に対する解答と解説：

肉眼的には僧房弁に主座する疣贅性心内膜炎と診断される。病理組織学的には細菌塊を伴う線維素化膿性心内膜炎であり、グラム陽性球菌が数珠状に連なっているのが観察される。これらの所見より、最も疑われる疾患としてレンサ球菌症が挙げられる。レンサ球菌症では心内膜炎のほか、髄膜炎、敗血症、肺炎、関節炎などが観察される。また、本菌は豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）との混合感染菌としても重要視されている。本例においても化膿性気管支肺炎と間質性肺炎が混在した肺病変が認められ、肺から PRRS ウイルスが検出されている。

### 質問2に対する解答と解説：

疣贅性心内膜炎は細菌感染によるものがほとんどで、主に豚や牛において認められる。豚では *Streptococcus suis* や *Erysipelothrix rhusiopathiae* など

によるものが多く報告されている。したがって、鑑別すべき疾患としては豚丹毒が挙げられる。確定診断のためには、細菌検査が必要になる。ワクチンプログラム情報や豚群の抗体検査も、診断や今後の対策をする上で大変参考になる。

豚では主に僧房弁において疣贅性心内膜炎が形成される。このため、細菌塊を含む疣贅物が心内膜側より剝離すると、腎臓などに病変を形成することがある。

一方、牛では *Arcanobacterium pyogenes* や *Streptococcus dysgalactiae* などが原因となり、病変は主として三尖弁に主座する。細菌塊を含む疣贅物が剝離した場合、肺塞栓症や肺膿瘍の原因になる。疣贅性心内膜炎が観察された場合には、他臓器に転移病巣の有無を確認することも必要である。

キーワード：豚、心内膜炎、レンサ球菌症

※次号は、小動物編の予定です